平成二十五年度 鹿児島大学附属図書館貴重書公開

島津氏と近衛家の七百年

島津十文字紋

近衛牡丹紋

鹿児島大学附属図書館

はじめに

万寿年間(1024-28)、大宰大監平季基は日向国島津院(都城市)を開拓し、関白藤原頼通に寄進した。これが我が国最大級の荘園となる島津荘の始まりである。時は過ぎ文治元年(1185)、鎌倉幕府御家人惟宗忠久(島津忠久)が、この島津荘の下司職として薩摩国山門院(出水市)に入る。島津忠久の出自である惟宗氏は京都で近衛家の家司をつとめた家柄で、この接点が島津氏と近衛家を結ぶ絆となった。爾来700余年、島津氏と旧主近衛家の繋がりは、折に触れ歴史に登場する。

今回の貴重書公開展は、鹿児島大学が島津家から譲り受けた貴重書、玉里文庫を公開することによって、島津氏と近衛家の絆を概観した。

この貴重書公開展は、鹿大附属図書館貴重書管理委員会(法文学部内山弘教授他)と附属図書館イベントワーキンググループによって企画運営されたものである。この場を借りて申し添えたい。

平成25年12月　鹿児島大学附属図書館長　野呂忠秀

目　次

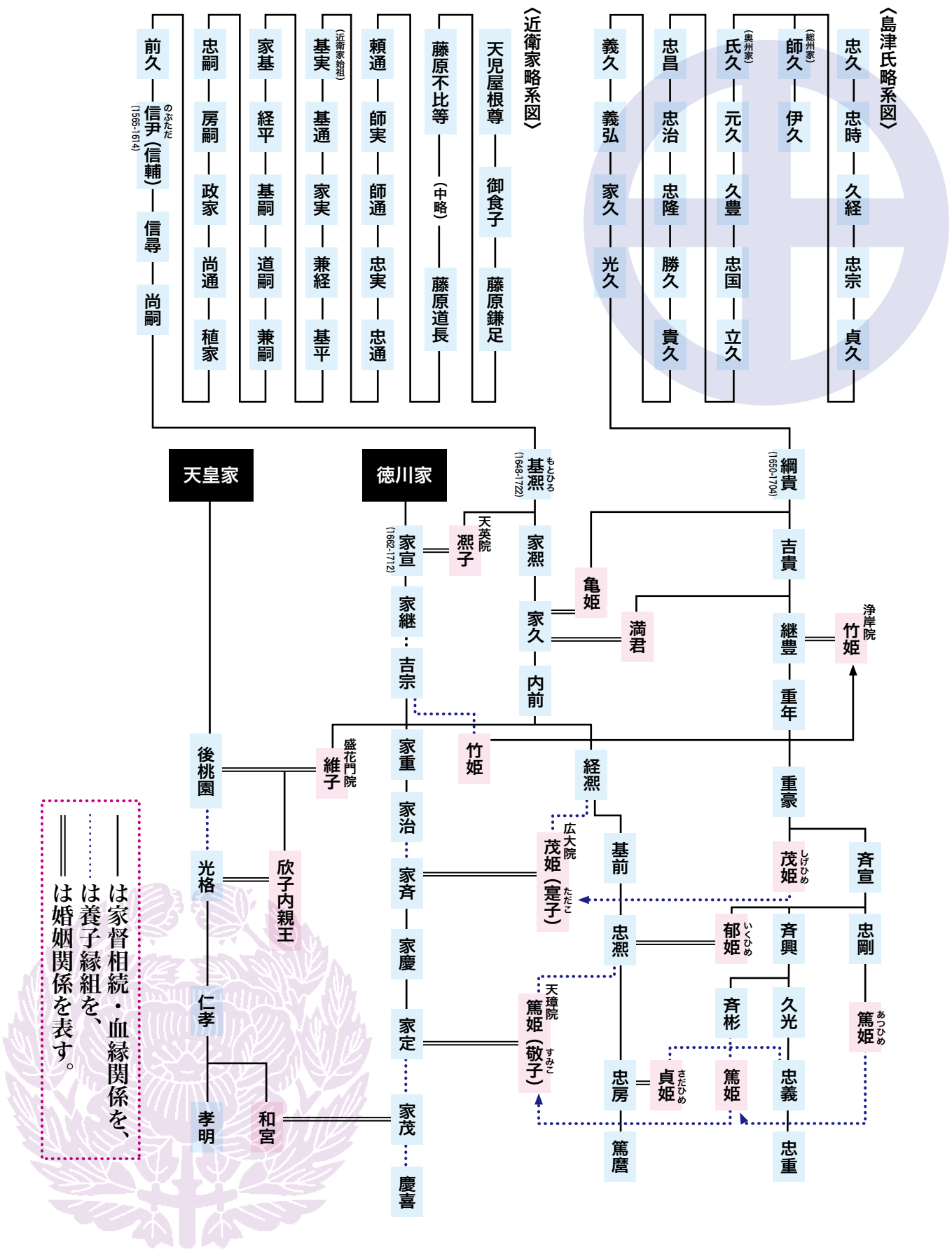
島津氏・近衛家関係系図……1

１．島津荘と近衛家……2
①近衛殿餝剣と近衛家柏夾　②装束織文図会
③文永八年七月十六日留守沙弥某下文　④管窺愚考

２．近衛信尹の薩摩下向……5
①近衛信輔公御歌　②三国名勝図会(その１)　③薩藩名勝志
④阿蘇墨斎玄与近衛信輔公供奉上京日記　⑤三国名勝図会(その２)
⑥宝生流謡本

３．近衛家との絆～婚姻・養女……9
①源氏物語　②古筆源氏物語　③西藩野史　④御屋地君略伝
⑤御上京御道中并御在京記　⑥御垣の下草　⑦近衛基前和歌短冊
⑧心つくし

島津氏・近衛家関係系図


〈島津氏略系図〉
忠久
忠時
久経
忠宗
貞久
師久（総州家）
伊久
氏久（奥州家）
元久
久豊
忠国
立久
忠昌
忠治
忠隆
勝久
貴久
義久
義弘
家久
光久
〈近衛家略系図〉
天児屋根尊
御食子
藤原鎌足
藤原不比等
（中略）
藤原道長
頼通
師実
師通
忠実
忠通
基実（近衛家始祖）
基通
家実
兼経
基平
家基
経平
基嗣
道嗣
兼嗣
忠嗣
房嗣
政家
尚通
稙家
前久
信尹（信輔）（1565-1614）
信尋
尚嗣
天皇家
徳川家
基凞（1648-1722）
綱貴（1650-1704）
家宣（1662-1712）
凞子（天英院）
家凞
吉貴
亀姫
家久
満君
継豊
竹姫（浄岸院）
家継
吉宗
内前
重年
後桃園
維子（盛花門院）
竹姫
経凞
重豪
家重
家治
広大院
茂姫（寔子）
基前
茂姫（しげひめ）
斉宣
光格
欣子内親王
家斉
郁姫（いくひめ）
斉興
忠剛
忠凞
家慶
天璋院
篤姫（敬子）
斉彬
久光
篤姫（あつひめ）
仁孝
家定
忠房
貞姫（さだひめ）
篤姫
忠義
孝明
和宮
家茂
篤麿
忠重
慶喜
は家督相続・血縁関係を、
は養子縁組を、
は婚姻関係を表す。

1．島津荘（しまづのしょう）と近衛家

正応４年（1291）頃に記された島津荘荘官等申状（『旧記雑録』前編 893）によれば、島津荘は、万寿年間（1024～1028）に「開発」され、当時後一条天皇の関白であった藤原頼通に寄進された「無主荒野の地」に始まる。この地は、日向国諸県郡島津（現在の宮崎県都城市郡元付近）を中心とする地域と推定されているが、都城盆地における平安時代～中世初頭の遺跡の分布状況などから、島津荘立荘の場所は全くの「無主荒野」ではなく荒廃耕地であった可能性が指摘されている（桒畑光博「島津荘の成立をめぐる諸問題」、『地方史研究』341 号、2009 年）。

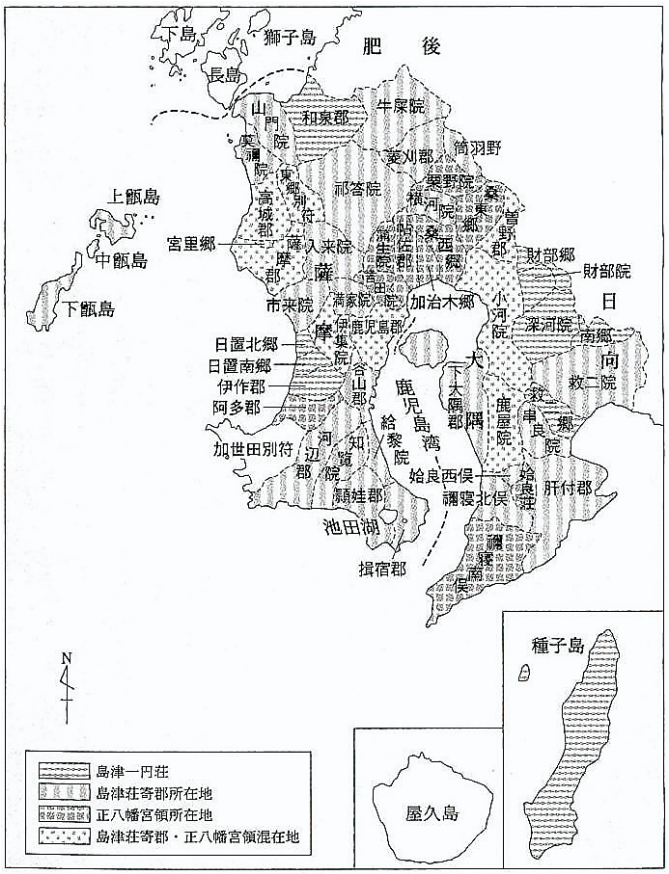
12 世紀に島津荘の荘域は大きく広がり、建久図田帳（建久８年（1197）に鎌倉幕府が九州諸国へ命じて作成させた土地台帳）によれば、島津荘の面積は薩摩・大隅・日向３カ国の総田数の半分以上を占めるまでになった。その荘域は、一円荘（所当〈年貢〉・雑公事といった荘園からの税は荘園領主におさめられる）と寄郡（より(よせ)ごおり）（所当を二分して国司と荘園領主に、雑公事を荘園領主におさめる特殊型半不輸領）からなっていた。

島津荘の本家としての頼通の領有権は、女子（頼通娘の藤原寛子、あるいは頼通妻の隆姫女王を経て頼通養女の祐子内親王）に相続されたのち、藤原忠実（頼通の曾孫）の手に渡り、高陽院（忠実娘の藤原勲子〈改名後は泰子〉、鳥羽上皇后）領の一つとなって、近衛基実（忠実の孫）に伝わる。そして、平氏による摂関家領押領事件（1166 年の基実の急死後、摂関家領が基実正妻の平盛子の所領とされ、彼女の父である平清盛が事実上管理することになった）や文治争論（1186 年に起こった摂関家領荘園群をめぐる近衛家と九条家の争い）などを経て、島津荘を含む高陽院領は近衛家領として確定された。

島津荘は、本家の下で領家が支配する荘園であった。元暦２年（1185）８月 17 日源頼朝下文（『島津家文書』文書番号３）には、「領家大夫三位家の下文の状に任せ」て、島津氏初代の忠久を島津荘下司職に補任する旨が記されている。この「大夫三位」とは、摂関家の有力家司であった藤原邦綱の娘成子と推定される。彼女は興福寺一乗院に入室した実信（近衛基通の息子）の乳母（めのと）であり、島津荘の領家を含む彼女の所領は実信に伝えられて一乗院領となった。一方、忠久が補任された島津荘下司職は、翌文治２年（1186）までに地頭職に転化している。

忠久が建仁３年（1203）の比企の乱（鎌倉幕府の有力御家人であった比企能員とその一族が北条氏によって滅ぼされた事件）に縁座したため、それ以降の鎌倉時代においては、島津氏は島津荘大隅方・日向方惣地頭職を失っていた。しかし、建武新政の下、島津氏５代の貞久は、島津荘大隅方一円荘惣地頭と同寄郡預所に任命されたと見られる。近衛家や一乗院による島津荘領有が史料上確認できなくなる室町期には、島津氏は内訌や国人一揆に直面しつつも、三カ国（薩摩・大隅・日向）守護として領国支配を安定化させていくのである。

その島津氏が再び近衛家に接触してきたのは、延徳元年（1489）のことであった。島津忠昌（島津氏 11 代）に仕える村田経安が、近衛政家（近衛家 13 代）を訪ねたのである。経安は、「島津」から「家門の由緒」にもとづいて政家のところに祇候するよう命じられたと述べており、それを聞いた政家のほうも「そもそも島津荘は近衛家の根本家門領であり、島津氏はその旧好を存じているのだろうか」と推量している（『後法興院記』延徳元年 11 月 17 日条）。かつての島津荘の領有体系上の関係を拠り所として、近衛家と島津氏の縁が復活したのである。（金井）



図版引用：原口泉ほか著『鹿児島県の歴史』第２版 山川出版社2011

①近衛殿餝剣（このえどのかざだち）と近衛家柏夾（このえけかしわばさみ）

玉里文庫・天の部108番知新箱1930-1931

五摂家筆頭である近衛家当主が朝廷における儀式の際に用いた餝剣は、「かざだち」と略称されていた。玉里文庫に伝わる近衛殿餝剣の図は写本一巻全五紙、近衛家以外の貴族から借り出した近衛家餝剣の図を写し取り、近衛家側に確認を依頼、 指摘を受けた相違箇所について注記してある。また広橋家に伝わる餝太刀との比較結果も記載してある。

近衛殿餝剣には、近衛家餝剣の図が作成された経緯や写し取られた近衛家餝剣の図を近衛家・広橋家の餝剣と比較した結果が記載されている。図版は、近衛殿餝剣の図全五紙中第一紙の部分である。近衛家餝剣の図が作成された経緯や写し取られた近衛家餝剣の図を近衛家・広橋家の餝剣と比較した結果が注記されていることが分かる。

近衛家当主等が朝廷における儀式の際に使用した冠を描いているものが、近衛家柏夾である。近衛家餝夾は写本一巻全五紙で、その内四紙に山科家・近衛家・高倉家の冠等が描かれている。図版は近衛家餝夾第二紙目で、近衛家当主が使用した冠が彩色付きで描かれている。伊勢貞丈が「外折而内巻」と記載していることが確認される。

近衛家柏夾は、 明和９年に伊勢平蔵貞丈が写し、その後享和３年伊勢貞春が所蔵していた蔵本を有馬伴左衛門純応が写したものが玉里文庫に伝わっている。（日隈）

近衛殿餝剣

近衛家柏夾

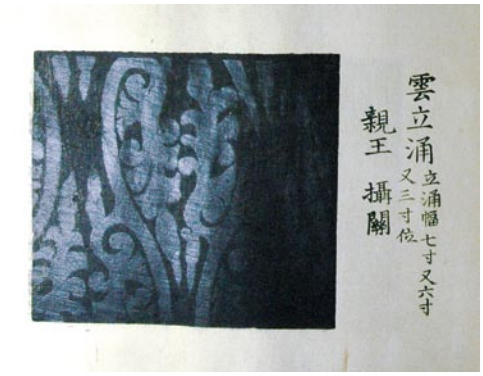
②装束織文図会（しょうぞくしょくもんずえ）

玉里文庫・天の部92番849
玉里文庫・天の部97番874

朝廷における王家（天皇家）･貴族達は、家格･官位･年齢等により、使用する衣服の柄や色が定められていた。図版は、 装束織文図会の七丁目の表・裏の部分である。袍の色・柄について描かれているが、七丁表部分では、翼の長さが七寸・頭から足迄の長さが八寸の鶴が雲の中を飛ぶ「雲鶴」と雲が湧き出る状態を三寸、六寸、七寸間隔で描いた「雲立涌」とは親王（天皇の兄弟達・皇子達）や摂関（近衛・九条・鷹司・二条・一条家当主）の使用が定められていたことが記載されている。七丁裏部分には、袍の「雲涌立」は、奴袴の文と同様親王家と近衛家が使用すること、袍の「雲涌立」で雲が湧き出る幅が三寸二分であるものは、奴袴の文と同様一条家が使用することが定められていたこと等が記載されている。このことから近衛家当主は、王家関係者と同じ柄や色の衣服を用いることがあったこと、そのことは、近衛家が五摂家筆頭であり、近衛家当主は貴族社会において最上位に位置していることを示していると考えられる。

装束織文図会は、王家・貴族達が使用することを許された衣服の柄や色を示したもので、江戸後期松岡士弁（辰方）が著し、玉里文庫には刊本一冊四十六丁の大本として合わせて三冊が伝わっている。享和元年の藤原基年叙文、寛政12年３月の藤原正臣の跋文、文化12年10月　日付けの本間百里の跋文が有る。（日隈）

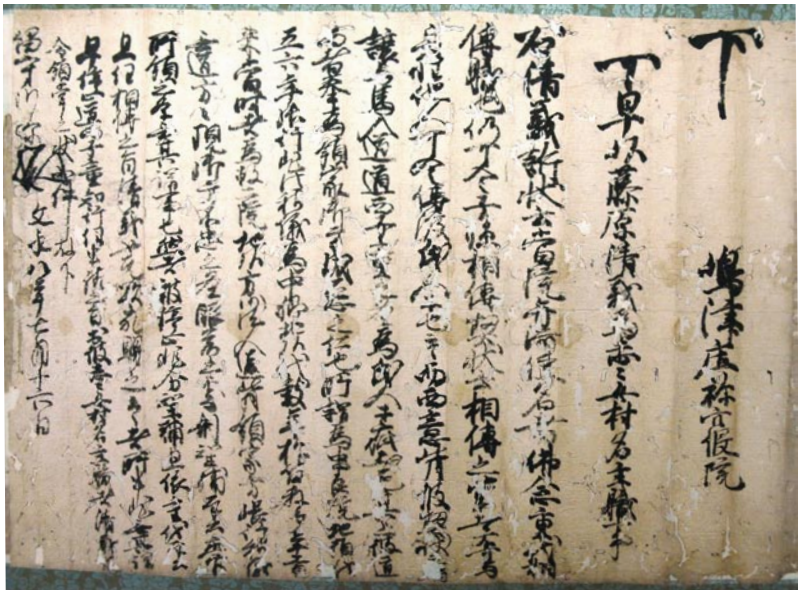
雲鶴の図



雲涌立

③文永八年（1271）七月十六日
留守沙弥（るすしゃみ）　某下文（くだしぶみ）
志々目文書

島津荘留守職の沙弥某が、藤原（富山）清義を島津荘大隅方禰寝院志々目村（鹿屋市獅子目町）の名主職に補任（ふにん）した下文。この名主職は、藤原義房（法名西意、清義の叔父）から馬入道道西の子に譲られていたが、清義は、道西の子がこの職を継承してきた藤原氏の人物でないことや、道西が串良院地頭代として新儀の非法を行うなど領家たる興福寺一乗院にとって「悪を成す」者であることなどを留守職に訴え、この下文を獲得した。近衛家と一乗院が遠隔地の島津荘を維持する上での留守職の役割がうかがえる文書である。なお、建仁３年（1203）の比企の乱に島津忠久が縁座したため、島津荘大隅方の惣地頭職は北条氏のものとなり、鎌倉幕府滅亡まで名越（なごえ）氏（北条氏の一族）に継承されていた。（金井）



④管窺愚考（かんきぐこう）
玉里文庫・天之部5番仁61

別名『島津御荘考』。伊地知季安（薩摩藩の記録奉行、『旧記雑録』編者）がその在野期間中、島津荘の歴史を中心に、同荘関連の古代～近世史を叙述した書物。天保３年（1832）に草稿を書き始め、翌４年に脱稿した。玉里文庫本は浄写本で、自筆草稿本作成後の補訂も加わっている。上・中・下の３巻と、典拠史料を集めた附録１巻からなる。写真は、下巻において、藤原頼通から近衛経忠（1302～1352）に至るまでの島津荘「領家」（厳密には本家）13人の変遷をたどっている箇所の冒頭。近衛家は鎌倉後期に家平と経平（いずれも近衛家基の息子）各々の家系に分裂しており、家平の息子である経忠は南朝に参じた。北朝においては、経平流の近衛家が存続した。なお、『管窺愚考』はのちに島津斉宣・斉興・斉彬ら歴代藩主の目にとまり、賞詞をうけたという。（金井）

2．近衛信尹（のぶただ）の薩摩下向

近衛家と島津氏の縁を語る上で、近衛信尹（近衛家 17 代当主）の名前は逸することができない。父前久（さきひさ）も天正 3 年（1575）から 5 年にかけて織田信長の要請を受けて九州の諸大名と和議を結ぶために薩摩を含む九州各地を回ったことがある異色の公卿で、島津義久に古今伝授を行うなど薩摩との縁も浅からぬものがあるが、信尹は坊津～鹿児島に流されていた 3 年の間島津義久の厚遇を受け、義久主従を初めとする地元人士との交流を通じて薩摩の地方文化の隆盛に大きく寄与した。坊津滞在中に詠んだ坊津八景の和歌は特に名高い。和歌のほか、連歌、絵画にその才を発揮していたが、とりわけ書に優れ、父の能くした青蓮院流（しょうれんいんりゅう）（御家流（おいえりゅう））を出て一流を成し、その独特の書体は信尹の号を取って三藐院流（さんみゃくいんりゅう）（近衛流とも）と称された。寛永の三筆の一人。

以下に信尹の略歴を記す。永禄 8 年（1565）11 月 1 日に近衛家 16 代当主の前久の子として出生。天正 5 年（1577）閏 7 月 12 日に 13 歳で元服。加冠役を務めた織田信長により「信」の一字を与えられ、信基（のぶもと）と名乗る。10 年（1582 年）6 月 2 日に本能寺の変により信長が自殺すると、父前久は落飾・出奔。信尹は家督を相続して信輔（のぶすけ）と改名。13 年 5 月 10 日には 21 歳にして左大臣に昇るも、内大臣羽柴秀吉の論功行賞を巡り、左大臣を秀吉に譲り翌年に前左大臣の立場で関白に任ぜられることを嫌った信尹は、半年前に関白に就任したばかりの二条昭実（あきざね）に対し関白職を譲ることを求める。この要求はとうてい昭実の受け入れられるものではなかったため、双方譲らず、議論は泥沼化する。所謂関白相論である。遂には秀吉の介入を招くことになり、秀吉が近衛前久の猶子となって関白に就任するという、信尹にとっては最悪の結果となる。19 年（1591）に秀吉の甥である秀次が関白となるに及び、信尹の鬱屈は頂点に達し、翌年正月 28 日に左大臣を辞し、30 日に京都を出奔、肥前名護屋に下向して秀吉に対し自らの朝鮮渡海を求めるに至る。もちろんこの望みは叶えられることはなく、文禄 2 年（1593）3 月には帰京させられたが、翌年 4 月 11 日に後陽成天皇の勅勘を蒙り、薩摩坊津に左遷された。これには関白秀次の意向が強く働いていたようである。4 年 7 月に秀次事件により秀次が除かれるや信尹の謫所（たくしょ）も鹿児島に移され、秀吉より在国料二千石を贈られている。慶長元年（1596）4 月には勅勘が解かれ、7 月 10 日に鹿児島を出発、9 月 15 日に帰京した。翌年 6 月 1 日に信尹と改名、10 年（1605）7 月 23 日には念願の関白に就任し、19 年 11 月 25 日に薨去した。享年 50 歳。極官は従一位関白左大臣。（内山）

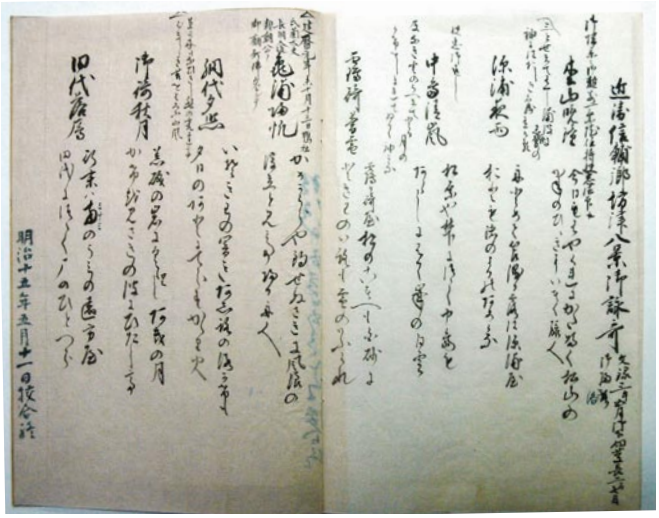
関連年表（『三藐院記』『信尹坊津紀行記別記』等に拠る）	
文禄3年（1594）4月 11日	勅勘を蒙り薩摩坊津への配流が決まる。
〃　（〃）　〃 14日	四十五名の供を引き連れ京都を出立。東寺まで島津忠恒が見送る。東寺で細川幽斎と合流。
〃　（〃）　〃 15日	山城淀で細川幽斎と別れ、船に乗り尼崎に到着。
〃　（〃）　〃 16日	海舟に乗り換えて尼崎を出発。
〃　（〃）　〃 24日	豊後佐賀関（現大分県大分市佐賀関）に到着。島津義久に使者を送る。
〃　（〃）　〃 5日	日向都城（現宮崎県都城市）に到着。北郷時久・忠虎父子の歓待を受ける。
〃　（〃）　〃 8日	大隅海潟（現鹿児島県垂水市海潟）に到着。風待ちのため18日まで逗留。『三国名勝図会』巻44に同地の江之島・袖の浦の地名を信尹が命名したとの記事あり。
〃　（〃）　〃 19日	薩摩山川（現鹿児島県指宿市山川）に到着。唐船を見物。
〃　（〃）　〃 20日	唐船の琉球人と小宴。薩摩頴娃（現鹿児島県南九州市頴娃町）に到着。
〃　（〃）　〃 21日	薩摩坊津（現鹿児島県南さつま市坊津町）に到着。
〃　（〃）　6月　2日	信長十三回忌供養のため一乗院にて焼香。前日に三百疋寄進。
〃　（〃）　8月　4日	鹿児島より連歌師の高城珠長が来訪。連歌五十韵（5～6日）。
文禄4年（1595）1月 17日	島津義久より書状と贈り物来る。
〃　（〃）　8月　1日	秀吉より謫所を坊津から鹿児島に移すとの書状が届く。
〃　（〃）　〃 28日	坊津を出発し鹿児島に向かう。
〃　（〃）　某月 14日	伊集院忠棟の館にて茶の湯。
〃　（〃）　某月 10日	島津義弘の館にて茶の湯。
文禄5年（1596）7月 10日	帰京を許され鹿児島を出発。大隅浜市（現鹿児島県霧島市隼人町浜之市）に到着。島津義久より歓待を受ける。
〃　（〃）　〃 11日	島津義久の館にて歌会。晩に乱舞。
〃　（〃）　〃 12日	座敷能を楽しむ。
〃　（〃）　〃 13日	座敷能。晩に乱舞。信尹自ら舞（二人静）、太鼓（老松）。島津義久より贈り物。
〃　（〃）　〃 16日	日向庄内（現宮崎県都城市荘内町）に到着。伊集院忠棟の館に逗留（～23日）して歓待を受ける。
〃　（〃）　〃 20日	島津義久来る。座敷能を楽しむ。
〃　（〃）　〃 21日	座敷能。暁まで宴会。島津義久自らワキ（定家）を演ず。
〃　（〃）　〃 22日	島津義久帰城。伊集院忠棟に茶を振舞う。
〃　（〃）　〃 24日	庄内を出発し、日向志布志（現鹿児島県志布志市）に到着。
〃　（〃）　9月 15日	京都に到着。

①近衛信輔公御歌

玉里文庫・天の部5番84

信尹（信輔）は薩摩に配流されていた約３年のうち１年３ヶ月を坊津の地で過ごした。信尹の日記である『三藐院記』（陽明文庫蔵）と『信尹坊津紀行記別記』（同）によって信尹の坊津での生活の一端を窺うことができるが、「聞しにかはり人家もすくなく人の往来もまれ」であった坊津は「なにかにつけて不如意千万なる所」であり、「はての〳〵はて」であった。そのような不自由な中でも、一乗院で風呂や茶を馳走になったり、和歌を詠み鹿児島の連歌師高城珠長との連歌を楽しむなど、ささやかながらも楽しみはあったようである。

この時期の実体験から詠まれたものが近江八景の坊津版である坊津八景の歌である。近江八景自体が信尹の選定によるというのが近年は有力になってきているが、近江八景の「三井晩鐘」「唐崎夜雨」「粟津晴嵐」「比良暮雪」「矢橋帰帆」「勢多（瀬田）夕照」「石山秋月」「堅田落雁」に対し、坊津八景では「松山晩鐘」「深浦夜雨」「中島晴嵐」「鶴崎暮雪」「亀浦帰帆」「網代夕照」「御崎秋月」「田代落雁」が配されている。（内山）

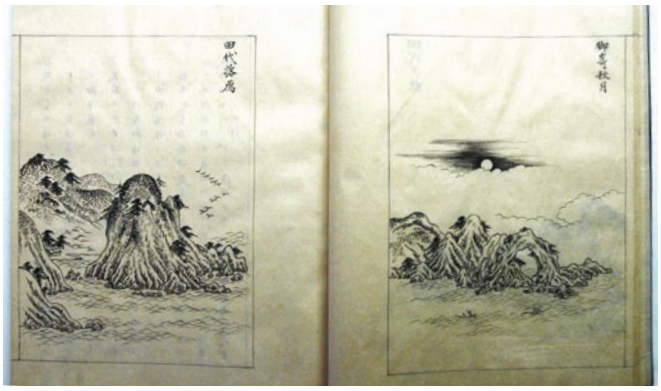


②三国名勝図会（その１）

玉里文庫・天の部69番618

『三国名勝図会』は全60巻60冊。薩摩藩最初の名所図会は文化３年（1815）に成立した『薩藩名勝志』（全19巻）であるが、これに文政７年（1824）の藩命により各郷から提出された「再撰帳」と呼ばれる最新版の地誌を加えて増補改訂したものが本書である。編者は五代秀尭・橋口兼柄。書名の「三国」とは薩摩藩の所領であった「薩摩」「大隅」「日向」を指す。その巻数からも窺えるように、本書はまさに薩摩藩の地誌・名所図会の集大成ともいうべき存在である。本書は天保14年（1843）の序文を持つ写本であるが、江戸時代には遂に出版するには至らず、明治38年（1905）に和装本60巻20冊本として初めて刊行された。

図は「坊津八景」のうち、「御嵜秋月」と「田代落鴈」（巻26）。近衛信尹の坊津八景の歌に合わせて坊津の情景を描いている。（内山）

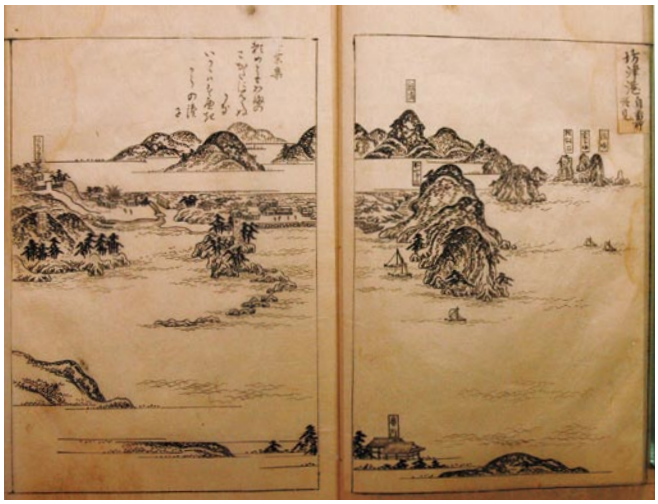


③薩藩名勝志（さっぱんめいしょうし）

玉里文庫・天の部42番523

坊津に配流された近衛信尹の住居として与えられたのは「人のすみあらしたるありさま」で「うちこもり、ひき（低）くせは（狭）くあれはてたる住居」であった。一行は「推量之外のありさま」に「目と目をみあはせ、とかくことの葉もなく、老（おい）たるも若（わかき）もともに口惜（くちをし）くなみた（涙）」を流したという（『信尹坊津紀行記別記』）。『薩藩名勝志』巻6の坊津港の絵に描かれている「近衛屋舗（このえやしき）」がそれである。従一位前左大臣の住まう家としてはあまりにも粗末なものであったが、信尹は10日後には苫葺（とまぶき）にしつらえる（『三藐院記』）など、浪々の身にありながらも少しでも住みよい家にしようと前向きであったことが窺える。

『薩藩名勝志』は全19巻。天明・寛政年間に藩命により薩摩藩内の各郷から提出された地誌に関する報告書（諸郷名勝志）をまとめ、絵図を作り薩摩の名所を詠んだ詩歌を収集して編纂した薩摩藩最初の名所図会である。編者は本田親孚（ちかざね）・平山武毅。文化3年（1806）序を有する。（内山）

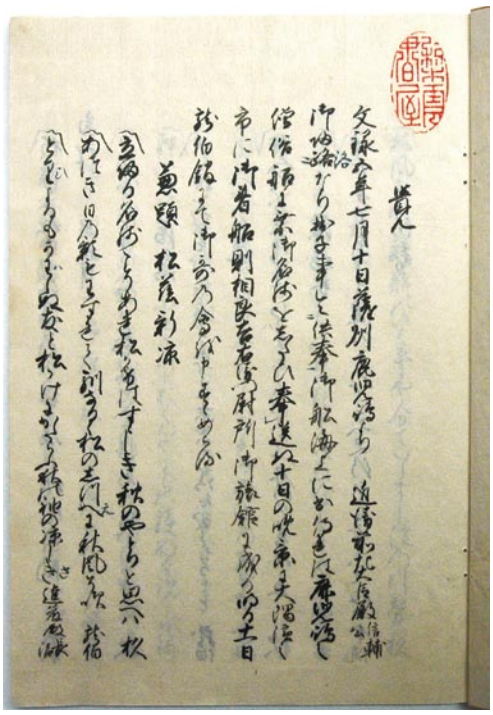


④阿蘇墨斎玄与近衛信輔公供奉上京日記（あそぼくさいげんよこのえのぶすけこうぐぶじょうきょうにっき）

玉里文庫・天の部5番68

勅勘を蒙り薩摩国坊津へと配流となっていた近衛信輔（信尹）が、文禄5年（1596、慶長元年に改元）に許され、京へと上る際に同行した阿蘇玄与の日記である。阿蘇玄与惟賢（これかた）は島津氏に仕えた武将・歌人。一行は大隅半島を廻り、志布志・細島（日向国）・豊後・瀬戸内海を海路にて帰京した。阿蘇玄与は京での約半年にわたる滞在中、当時第一級の文化人であり武将であった細川幽斎（ゆうさい）の饗応を受け、里村紹巴（じょうは）（室町末期の連歌師。連歌の第一人者）らとともに各地の名所をめぐるかたわら、和歌・連歌・碁に興じた。また細川幽斎からは『伊勢物語』『古今和歌集』などの講義を受け、当時の最高最新の古典学を学んでいる。

この近衛信輔の薩摩配流の後、島津家と近衛家の関係はより密接になっていくことから、転換点を迎えた両家の様相を捉えた一級の資料といえる。（亀井）

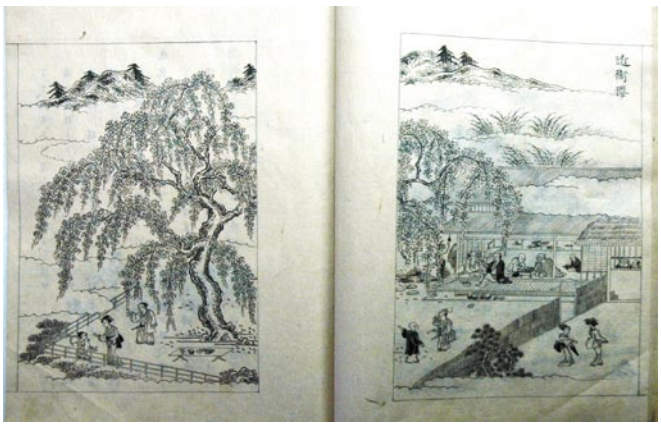


⑤三国名勝図会（その２）

玉里文庫・天の部69番618

『三国名勝図会』巻２に「近衛桜」と題する桜の絵図が収載されている。本書によれば、近衛桜は原良村の島津久誠の別墅にあり、京都の近衛屋敷の庭に植えられているものと同じ垂糸桜である。かつては天を覆うほどの大樹で、多くの枝が地に垂れ、春毎に見事な花を咲かせていたが、残念なことに近年になって枯れてしまったので、その跡地に再び同種の桜を植えたという。花見を楽しむ老若男女の姿とともに描かれているこの桜は枯死する前の近衛桜の姿であろうか。鹿児島の近衛桜と近衛信尹との関係は不明であるが、少なくとも京都の近衛桜の盛名が遠く鹿児島の地にも鳴り響いていたことは確実である。

なお、同巻には「近衛水」（絵図なし）という項目もある。近衛水は坂本村冷水の北郷氏の宅地にある霊水で、坊津に配流されていた信尹が配所を鹿児島に移された際に、この水を硯の水に用いたことから、近衛水と呼ばれるようになったのだという。伝承の信憑性はさておき、当代一流の貴人である信尹の来鹿がいかに当地に影響を及ぼしたかがよくわかる挿話と言えよう。（内山）



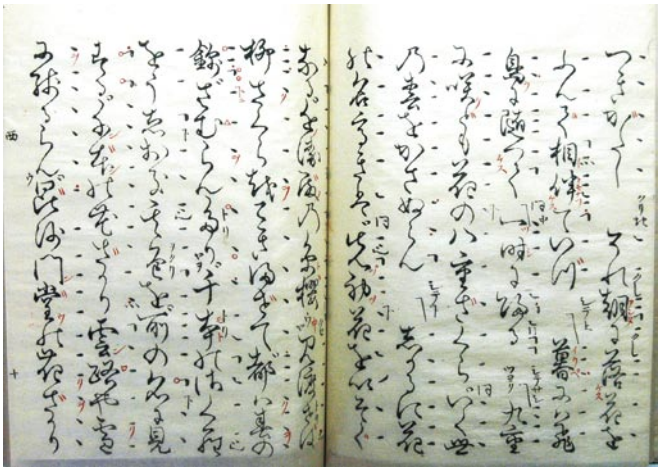
近衛桜の図（三国名勝図会）

⑥宝生流謡本

玉里文庫・天の部35番493

京都の近衛屋敷の枝垂桜は「近衛殿の糸桜」の名で知られ、洛中屈指の名花であった。謡曲「西行桜」にも、シテである老木の桜の精が京の桜名所尽くしを西行その他の人々に語る場面において「しかるに花の名高きは、先初花をいそぐなる、近衛殿の糸桜」とまず第一にこの桜を挙げているほどである。図版の桜の写真は近衛屋敷跡の枝垂桜（京都御苑。平成25年３月23日、京都女子大学教授・坂本信道氏撮影）である。枝垂桜の大木が約30本植わっているが、京都では一番早く咲き始める桜としても知られており、今なお大勢の花見の人々で賑わっている。

図版の謡本は10巻10冊（内百番５巻５冊、外百十番５巻５冊）。宝生流の謡本としては初めての刊本で、十四世宝生大夫英勝が校正を加えたもの。宝生流初伝の内外二百十番を収める。（内山）



西行桜（宝生流謡本）

現在の近衛桜

3．近衛家との絆～婚姻・養女

近衛家と島津家は、江戸初期以来、縁組を島津家内部で執り行っていた。藩祖家久は伯父の島津家当主義久の娘を正室に迎え、その没後は一門の島津忠清の娘を継室とした。2代藩主光久も家臣伊勢貞昌の娘を正室とし、その没後は公家の平松中納言時庸の娘を継室に迎えた。中世以来、近衛家の門流（公家の主従関係／近衛家を主家と仰ぐ家）であった島津家は、同じく近衛家の門流である平松家と門流同士で縁組を行ったことになる。子女もまた、男子は別家して家臣となるか、重臣の養子となり、女子は重臣に嫁入りしたが、子女の数が多ければそれだけでは片付かない。3代藩主綱貴の娘亀姫は関白近衛家久の室となり、その没後は4代藩主吉貴の娘満君が継室となる。この近衛家との縁戚関係は、のちの島津家と徳川家の関係に大きな影響を与えることになる。

宝永5年（1708）6月8日、幕府より5代将軍徳川綱吉の養女竹姫と鍋三郎（のち5代藩主継豊）の縁組の打診があったが、幼さを理由に断ることになる。ところが、享保14年（1729）4月6日、再び竹姫を継豊の後室にとの打診を受ける。この縁組の実現に、大奥の天英院が動く。天英院は6代将軍徳川家宣の正室であり、その父は太政大臣近衛基凞であった。すなわち、島津吉貴は天英院の甥の舅という関係になる。天英院からの強い要請があったことは想像に難くない。同年6月に縁組が実現することになる。

その竹姫は、島津家と徳川家の関係を深めるため、6代藩主宗信と尾張藩主徳川宗勝の娘房姫を婚約させ（房姫の輿入れ前に宗信が死去）、義理の孫で8代藩主重豪の正室に一橋徳川家当主宗尹の娘保姫を迎えさせ、さらに遺言による重豪の娘茂姫と一橋治済の長男豊千代（のち11代将軍徳川家斉）の縁組が行われた。10代将軍家治の急死により、家斉が11代将軍の座に就くことになると、将軍家御台所に相応しい格式を持つため、茂姫は近衛家の養女となり、その後、家斉と茂姫の婚儀が執り行われた。

また、9代藩主斉宣の娘郁姫は、文政8年（1825）に関白近衛忠熙と婚約。父斉宣が隠居の身であったため、兄で10代藩主斉興の養女となって近衛家に嫁ぐこととなった。忠熙との間に忠房をもうけ、その忠房は甥で薩摩藩11代藩主斉彬の養女貞姫を正室に迎えている。さらに、斉彬の五女寧姫は忠熙の養女となり、のちに12代藩主茂久（のち忠義）の継室に迎えられる。

嘉永3年（1850年）、幕府より御台所候補の打診が島津家へあった。13代将軍家定の正室を鷹司家、ついで一条家に奪われた近衛家は、この幕府の意向に乗ろうと考える。斉彬は養育していた一門今和泉家島津忠剛の娘一子（のち篤姫）の実子届を出し、篤姫は近衛家の養女となり、安政3年（1856）12月18日に家定と婚儀を挙げたのである。

島津家、近衛家、徳川家、それぞれの思惑が渦巻くなかで、島津家は近衛家を介して2人の将軍家御台所を輩出したのである。

最後に、島津家と近衛家を結んだ2人の人物を紹介しておこう。木村探元（1679-1767）は薩摩藩の御用絵師で、江戸で狩野探信に師事、雪舟にも傾倒し、室町風の水墨画を得意とした。享保19年（1734）家凞の子家久に招聘されて上京し、半年間ほど京都に滞在した。その間、近衛家のもとで期間限定の御抱絵師として作画御用をつとめた。税所敦子（1825-1900）は歌人で、宮家付の武士林篤国の子に生まれ、のちに薩摩藩士税所篤之の妻となる。千種有功に桂園派の和歌を学ぶ。28歳で夫に死別したのち、島津家、京都近衛家に仕えた。明治8年（1875）に皇后の歌のお相手として宮中に出仕、亡くなるまでの26年間精勤した。歌日記『心つくし』（1853年）、歌集『御垣の下草』（1888年）、『内外詠史歌集』（1895年）などがある。（佐藤）

①源氏物語（げんじものがたり）

玉里文庫・天の部217番1371

『源氏物語』の室町末期頃の写本。本書は公家・大名の子女が輿（こし）入れの際に持参する、いわゆる「嫁入り本（よめいりぼん）」といわれる嫁入り道具のひとつである。当時の姫たちは、必ず修めなければならない教養として、和歌を詠むことや古典に通じていることが求められた。『源氏物語』はその代表的な古典作品のひとつである。

本書は近衛家より天皇家への嫁入り本として伝わった。その後、近衛忠凞（ただひろ）（1808 ～ 1898）に嫁いだ島津斉興（なりおき）（1791 ～ 1859）の養女郁姫（いくひめ）（1807 ～ 1850）に譲られ、さらに玉里島津家へと受け継がれたものである。島津家と近衛家の姻戚関係を象徴するものといえるだろう。展示している黒塗蒔絵内箱の「源氏物語」の文字は近衛基凞（もとひろ）（1648 ～ 1722）の筆蹟と伝えられる。54 巻 54 冊。（亀井）

②古筆源氏物語（こひつげんじものがたり）

玉里文庫・天の部213番1361

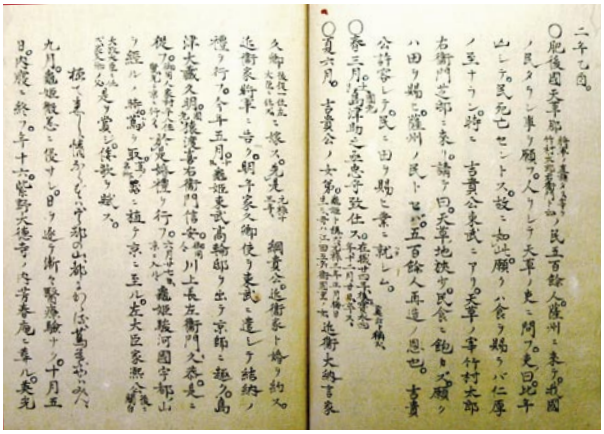
数ある『源氏物語』の中でも最も古い写本の一つで、一部が鎌倉時代までさかのぼることのできる室町時代初期の写本である。本書は『源氏物語』五十四帖のうち十五帖が残されており、十五帖を写した人物も古筆鑑定書（極書（きわめがき）・極札（きわめふだ））によって明らかになっている。それによれば、展示している「須磨」は後醍醐天皇（1288 ～ 1339）が筆写したとされる宸翰本（しんかんぼん）（天皇自筆本）である。同様に「賢木（さかき）」は後伏見院（ごふしみいん）（1288 ～ 1336）、「夕霧」は『十六夜日記（いざよいにっき）』の作者として有名な阿仏尼（あぶつに）の手によるものである。

当時の一流の天皇・公家・僧侶たち九名によって写されたこの十五帖が薩摩の玉里島津家へ残されていたことは、近衛家と島津家との深い繋がりをしめす証左のひとつといえるだろう。（亀井）

③西藩野史（せいはんやし）

玉里文庫・地の部 4 番 2047

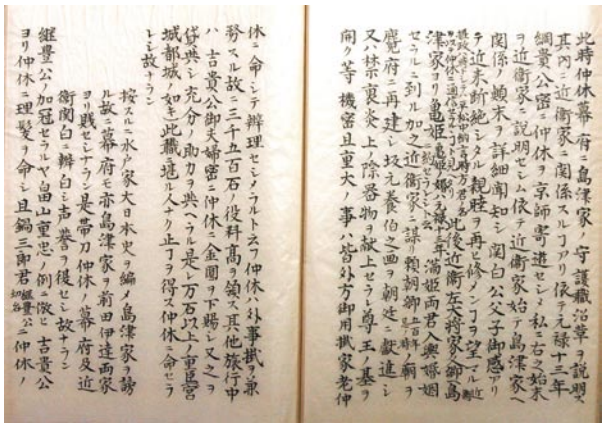
『西藩野史』は 23 巻 15 冊。宝暦 8 年（1758）に得能通昭が著した島津氏の編年史で、清和源氏の祖である清和天皇から島津重豪（しげひで）までの歴史を詳細に記す。本書によれば、元禄 13 年（1700）島津綱貴（つなたか）（第 3 代藩主）は娘の亀姫を近衛家久（23 代当主）に嫁がせる約束を結んだ。翌年には結納の礼も済ませたが、宝永元年（1704）9 月に綱貴が病により薨じたため、跡を継いだ吉貴（よしたか）が同 2 年 6 月に父・綱貴に代わって婚儀を執り行い近衛家との約束を果たした。ところが、同年 9 月に亀姫は病に罹り、10 月 5 日に 16 歳で逝去してしまう。そこで翌年吉貴は娘の満君（当時 7 歳）を家久に嫁がせる約束をし、正徳 2 年（1712）12 月に満君は家久の継室となった。しかし、その満君も 3 年後の正徳 5 年 11 月に痘瘡により 17 歳で逝去したため、島津氏と近衛家の最初の婚姻は不幸な結果に終わった。その後は文政 8 年（1825）に郁姫（第 9 代藩主斉宣の養女）と近衛忠熙（27 代当主）が結婚するまで、両家が再び婚姻関係で結ばれることはなかった。（内山）



④御屋地君略伝（おやちぎみりゃくでん）

玉里文庫・天の部5番礼161

『御屋地君略伝』1 冊は島津義弘の長女で豊州家 6 代目当主島津朝久（ともひさ）の夫人であった御屋地君の二百五十回忌を記念して明治 18 年（1885）に編まれたもので、御屋地君本人とその子孫についての事跡が記されている。同書によれば、元禄年間に諸国絵図を改正するにあたり、幕府が日向国については島津・伊東両家の協議により製図せよと命じたので、三州絵図総裁の任にあった帯刀仲休（御屋地君の曽孫）が、島津氏は三州の守護であり、伊東氏は一郡の地頭に過ぎないから、島津氏が三州の製図を担当すべきであると幕閣に訴えたため、幕府は前命を取り消し島津氏に日向国の製図を命じ直したという一件があった。その際、島津氏の守護職たるの沿革において、近衛家に関わりがあるので、島津綱貴は元禄 13 年（1700）に仲休を京都に派遣して近衛家に事件の顛末を詳細に説明させたが、それがきっかけとなって長らく断絶していた島津氏と近衛家との間で親睦を深めようという機運が生まれ、遂には島津氏の亀姫と満君が相次いで近衛家久に嫁ぐに至ったという。（内山）



⑤御上京御道中并御在京記（ごじょうきょうごどうちゅうならびにございきょうき）

玉里文庫・番外の部 5016

宝暦 10 年（1760）3 月、第 8 代藩主島津重豪は京都に向けて江戸を旅立つ。

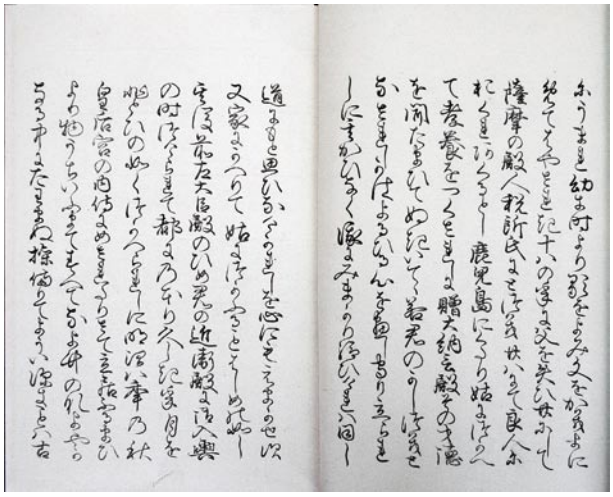
本書は、3 月 5 日江戸発駕以来 22 日京都到着までの東海道各宿駅での詳細と、同 4 月 7 日京都発駕以来 23 日江戸到着までの復路各宿駅での詳細を記した「御上京御往来御道中記」、3 月 22 日の京都到着以来 4 月 7 日の発駕までの京都滞在期間中，27 日の参内をはじめとして諸所の巡見の次第を記した「宝暦十辰年京都御着より御在京中并御発駕迄之一巻」、「御先御用之御聞番中村帯刀江相渡、御所司代井上河内守様江被差出候御書付并御用人江申談候書付」の 3 つの内容から構成されている。

題簽に「友三冊ニ而五冊之内」、内表紙に「宝暦十庚辰年三月御上京帳五冊之内」との記載があるので本書は端本であり、題簽の「友三冊ニ而」とは内容が三部作となっていることを示しているものと考えられる。（佐藤）

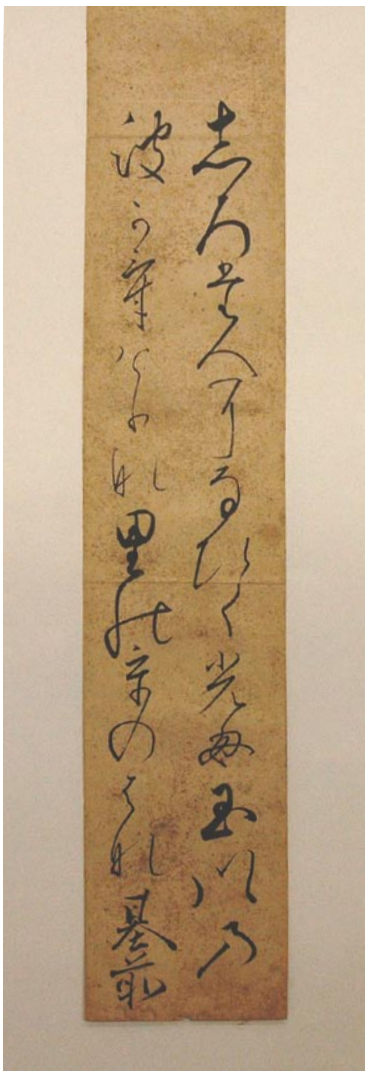
⑥御垣の下草（みかき　したくさ）

玉里文庫・人の部79番3456

明治 21 年（1888）刊の税所敦子（さいしょあつこ）（1825 ～ 1900）の歌集。高崎正風序。序文には敦子の履歴が簡潔にまとめられている（図版参照）。敦子は京都鴨川の東、錦織の生まれ。父は公家に仕える役人。若い時から和歌を千種有功（ちぐさありこと）に学び、大田垣蓮月、高畠式部らの女流歌人と交流をもった。18 歳で父と死別し、20 歳で薩摩藩士の税所龍右衛門篤之（？～ 1852）と結婚。長女徳子を出産した後、28 歳の嘉永 5 年（1852）、夫と死別し、翌年鹿児島に下り姑に孝養を尽くした（よく姑に仕えた挿話は明治の教科書によって広く知られた）。その後、島津斉彬（なりあきら）に見出され、その世子哲丸の守役（養育係）として出仕。斉彬、哲丸没後の文久 3 年（1863）には近衛忠房に嫁ぐ貞姫（斉彬養女）に従って京都へ上り、幕末維新の動乱期の近衛家を老女として支えた。さらに明治 6 年（1873）、貞姫（光蘭院）が東京へ移るとこれに従い上京。明治 8 年（1875）には近衛家を出て宮中に入り、権掌侍として後宮を支えた。敦子は才学に優れ、能書家でもあった。本書の版下は敦子の自筆である。跋で、孫子への忘れ形見として自詠の和歌を書写することを思い立ったが、老年ゆえ出版の形をとったと語っている。明治 33 年（1900）2 月 4 日没。（丹羽）

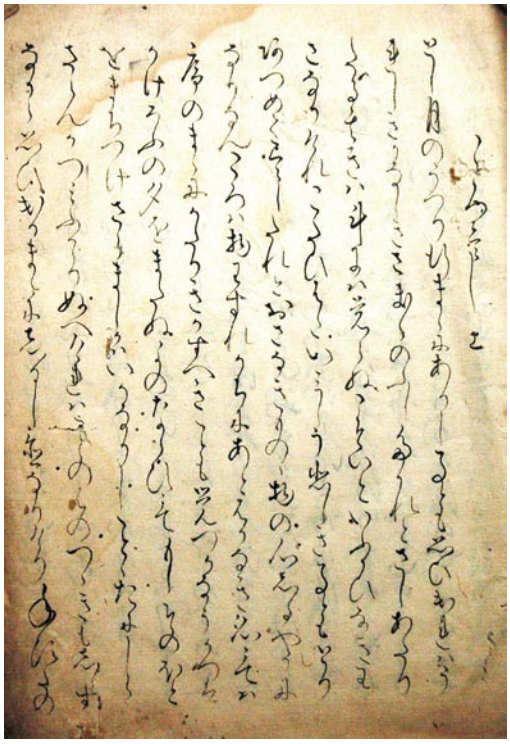


⑦近衛基前和歌短冊
木脇家文書



近衛基前は江戸時代後期の近衛家当主（1783 ～ 1820）。号は証常楽院。従一位左大臣に至る。木脇啓四郎（祐尚、後に祐業。1817 ～ 1899）は、旧藩時代、茶道や花道をもって鹿児島城に出仕したが、天保 14 年（1843）から 6 年、あるいは嘉永 3 年(1850)から 3 年、江戸藩邸詰を命じられ、そこで甲冑の製造法や有識故実の知識を習得し古器や武具の研究を進めた。鹿児島と江戸との登り下りには、絵画の師である税所龍右衛門（諱は篤之、画名は文豹）を訪問している。龍右衛門は、調所広郷の改革が行われていた天保末には京都詰であり、また、いつからかは不明ながら、近衛家の桜木町（鴨川の東、丸太町川端）にあった屋敷の番を務めていた（龍右衛門と敦子の結婚は弘化元年（1844））啓四郎は訪問の際、必ず敦子には和歌を詠んでもらったという。また、啓四郎はかつて敦子が仕える貞姫へ茶の湯、花を教授した経験もあることから、御殿にあがって「段々有がたき御品」を賜ったこともある（木脇啓四郎『萬留』）。木脇家文書に残る基前の短冊も下賜されたもののうちの一枚であろう。「しろたへになひく光も玉川の／波かけけりな里のうのはな　基前」（丹羽）

⑧心つくし
木脇家文書



税所敦子が夫である税所龍右衛門に先立たれ、嘉永 6 年（1853）4 月、一人娘の徳子を連れて鹿児島に下ったときの歌日記。識語によると、明治 11 年（1878）1 月 15 日に、税所龍右衛門（画号、文豹）の弟子であり、敦子とも親交があった薩摩藩士木脇啓四郎祐尚が、義弟の木脇祐治の依頼によって模写したものである。「模写」したのは、敦子自筆本であろう。題名は、さまざまに心を砕き悩むという意味に、九州の古名「つくし（筑紫）」を掛けている。上巻は夫との死別、薩摩藩邸への引き移り、その後判明した懐妊の事実、寺社への祈願、誕生した男子の死と繰り返し訪れる苦難の連続に絶望の淵に立たされながらも、生まれ育った故郷を後にして見知らぬ地へ旅立つまでを描く。下巻は中国路、九州路の旅の模様を描く。明石の浦、吉備津神社、厳島神社など名所を訪れ、京都を発って 22 日目に九州に入り、肥後国山鹿をへて 6 月初めに鹿児島に到着する。夫の実家は、鹿児島城下の南を流れる甲突川のほとりにあり、故郷のたたずまいに似て、窓の呉竹や垣根の朝顔に少し心を慰められているが、秋の訪れとともにわびしさと悲しみが身に押し寄せる。（丹羽）

平成25年度鹿児島大学附属図書館貴重書公開

島津氏と近衛家の七百年

編　者：内山　弘　（法文学部）
執筆者：内山　弘
丹羽　謙治（法文学部）
日隈　正守（教育学部）
金井　静香（法文学部）
亀井　森　（教育学部）
佐藤　宏之（教育学部）

発行者：鹿児島大学附属図書館
発行日：平成 25 年 12 月 1 日